



Data	
脚本・脚色・監督:	金綺泳 (キム・ギヨン)
原作:	毛允淑 (モ・ユンスク)
出演:	金振奎 (キム・ジンギョ) / 金芝美 (キム・ジミ) / 史美子 (サ・ミジャ) / キム・ミヨンジン

## 👁️👁️ みどころ

女たちが創作の源となる画家は多いが、日帝支配下の韓国では愛国者にひどい拷問が待っていたから、主人公の画家は今どんな境遇に？

他方、若き日にモデルを務めた女子高生は、“海のごとく冷たく、波のごとく強い女”に成長していたから、今2人の師弟愛（不倫愛？）は如何に？

「男女の倒錯した性愛」が小説、映画のテーマになることは多いが、政治（反共）の衣をまといながらそれを描くキム・ギヨン監督はかなり特異。鈴木清順監督の美学とは全く異質の、彼の演出を本作でしっかり観察したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■ 『レンの哀歌』のストーリーは？ ■□■

日本兵の拷問によって、2度と絵を描けなくなった画家シモン。そんな夫に失望しながらも家庭を支える妻。そして、子供の頃、その画家のモデルになった若い女レン。本作は、朝鮮戦争前後の激動のソウルを舞台に、そんな3人の運命が交錯するメロドラマだ。共産化の波が押し寄せる中で、南に逃れる人々の群れから抜け出し、廃墟と化したソウルでレンを探して彷徨うシモンだが、そこで2人は巡り合うことができるのだろうか？

### ■□■ 女を創作の源とする画家の今は？ ■□■

女子校で美術教師を務めていた時代のシモン（金振奎（キム・ジンギョ））は、妻が「昔は女たちがこの人の創作の源だった」と語るほど、「女の肉体に靈感を感じて見事に女を描く」画家だったらしい。しかし、日帝の支配下にあった朝鮮では、愛国者は弾圧されたから、シモンもソウルの独立門の横にある日本が建てた愛国者弾圧用の監獄でひどい拷問を受けたらしい。そのため、画家にとって最も大切な右手の自由を失ったうえ、女を自分の思うままに描きたいという彼の画家としての創作意欲も喪失してしまったようだ。

ちなみに、『戦争と人間』（70・71・73年）（『シネマ2』14頁、『シネマ5』173頁）の

第3部では、日本共産党の支持者たちが次々と弾圧されていく姿が描かれていた。その中心は、吉永小百合扮する順子の恋人で、東京帝大生の標耕平（山本圭）だったが、プロレタリア画家の灰山（江原真二郎）もその中に含まれていた。そして、彼らは次々と「転向」を強いられたが、さて、本作のシモンは・・・？

### ■□■元教え子のレンの今は？■□■

『肉体の約束』（75年）のヒロイン・スギョンは不幸だらけの女だったが、本作のヒロイン・レン（金芝美（キム・ジミ））は、若く美しく、かつ「海のごとく冷たく、波のごとく強い女」だ。女子高生の時にシモンのモデルを務めていたレンは、失意のどん底にあるシモンに再会すると・・・。

私は小学校3年生の時に合唱部に入り、美しいボーイ・ソプラノの声を誇っていた（？）が、シューベルトの「野ばら」は当時の部員たちの愛唱歌だった。本作にはなぜかその曲が再三登場するうえ、レンが父親の遺品としてもらったというフルートがさまざまな場面で「効いてくる」ので、それに注目！

### ■□■キム・ギヨン監督のテーマは、男女の倒錯した性愛！？■□■

パンフレットの解説で荻野洋一氏（批評家・演出家）は「韓国社会で嫌悪感の根強い不倫愛を倒錯的マゾヒズムで拡大的に描写しながら、それでも独裁的な朴正熙政権下でキム・ギヨンが活躍し得たのはどういうことか。」と問題提起したうえ、それに対して「反共映画の衣を多少なりともまとう素振りを見せながら、キム・ギヨンは男女の倒錯した性愛というおのれの本拠地を死守したのではなかったか。」と自ら回答を示している。「男女の倒錯した性愛」をテーマにした小説や映画は日本でも多く、とりわけ鈴木清順監督作品の美学は際立っているが、政治（反共）とのかかわりでそれを描いたものは存在しない。その点でキム・ギヨン監督作品は極めて異質な「男女の倒錯した性愛」と言わざるを得ない。

なお、本作は、1969年当時の映画としては珍しく（？）、時系列を動かしながらストーリーを展開させていくので、わかりにくい面もある。しかし、とにかく本作は、若く美しいレンと、年上の画家シモンとの師弟愛（もしくは不倫愛）の姿をしっかり観察したい！

2020（令和2）年3月30日記